

NANIWA JOSHI PRESS

TURN フェス5 違いを超えた出会いと表現

自分の感情を人形に込めて

夕焼けや青空、様々な背景の中で、個性的な人形たちが織り成すストーリー。そこには台本はなく、キャラクターと設定があるだけ。この人形劇を制作し続けて一〇年ほどだという飯塚貴士さんにお話を伺った。この作品は、『きもちシート』という紙に、登場するキャラクターの名前、最近の出来事、またその時どんな感情を持ったのか、などを書き込み、それを読んだ人がキャラクターをイメージし、人形をデザインする。そこから、自分がそのキャラになりきって、人形を動かす、声を吹き込んで完成する。キャラクターの設定と動かす人は別なのである。「ストーリーは、作る、というより、設定があつて、それをお互いに分かり合つてできるのです。」と話してくださいました。自分ではない、他人の感情を読み取り、自分ならどう思うのか、どう感じるのかを考えて制作するのだ。

この作品を制作したきっかけを尋ねた。飯塚さんは元々、人形劇の映像を撮影していて、小学生とワークショップを開いた際、人形の特徴を伝えると、人形になりきって、自分の経験をも

二〇一九年八月一日〜十八日、二〇日 にわたり、東京都美術館にて「TURN フェス5」が開催された。五回目となる今回のテーマは、「Pathways 身のゆくみち」。様々な展示、ワークショップ、パフォーマンスなどが繰り広げられた。

TURN のプロジェクトプロデューサーである、森司(もりつかさ)さんは、「テーマである『道』について、人間はいざなわれるのではなく、自ら意志を持って選んで歩いていくものである。また、自分の価値概念にとらわれるために、知らないところ、ものがたくさんあるが、様々な「ちがひ」を学習し、自由に価値観から逸脱し、今まで自分になかった新しいものの方を見方を習得してほしい、と願っていた。

TURN 24h

アートには人間一人一人に、新しい感覚や、感性に気付くきっかけを作り、言葉や理屈にとられない新しい視点を育む力がある。TURN は障害の有無や世代、性、国籍などの背景や習慣の違いのある人々に出会い、ともに時間を過ごし、表現として生み出すアートプロジェクトである。このプロジェクトを通し、自身を見つめなおすきっかけを作り、言葉に頼らない新しい感覚と発見を通して、人々の意識の枠組みと創造性を更新し、社会的で、文化的価値を築き上げていくのである。

これまでに約七〇名のアーティスト、約六〇〇の施設や団体が参加し年間を通して国内外で広く意義を発信している。

「道」を見つけて意識の散歩

真っ白の紙を手でくしゃくしゃと、シワや折り目をつけて、広げる。その紙に着いた模様を地図に見立て、ペンでなぞり、自分の好きな「道」を作り上げる。その道というのは、同じものは一度と作れない、偶然のアートである。「無意識の中で『意識』を散歩させるんです。」そう語ってくれたのは、このアートの発案者、岩田とも子さんだ。このシワのついた紙を地図に見立て、そこに小さな自分を想像しながら、進んでいく道を見つけて行く。その道は、実際に経験したことを元に作るのか、あるいは、いつかこんな道を行きたいという理想を持って作るのか、それは自由であるという。一九歳の時に失敗した折り紙の折り目をなぞったことが始まり。それが今になってアートになると思ってもいなかった、と岩田さんは笑顔で話した。一枚の紙とペン一本だけ

とにお話ができでいった、という。それを見て、これをもっと作品にしていこう、と思ったそう。日常で感じた気持ちを人形に代弁させ、自分の感情を認識することで、自己を見つめなおし、気持ちを整理することにつながるのではないだろうか。

妄想や幻聴の実際をもっと身近に

「猛烈な疲れで見える ガラスの光」ごはんを食べた後、なんとか回復『幻聴妄想かるた』東京都世田谷区にあるハーモニーは、就労継続支援B型事業所だ。そこは心の病を抱える方が集い、昼ごはんを食べたり、簡単な作業をしたり、困った時に相談できる場

↑人形劇の背景・キャラクターの作成紙



↑みんなが作ったキャラクター一達

↑岩田とも子さんの最初の作品

↑他者との共感ツール「幻聴妄想かるた」

↑自閉症を持つ子供が描いた絵

でだれでも簡単に出来る「意識の散歩」。紙面上だけでなく、現実においても常に、新しい道を見つけてながら生きていくのが大切である、と考えさせられる作品であった。

音の概念を超えた映像

耳の聞こえない映像作家である牧原依里さんに話を聞くことができた。同イベントでは、聾や難聴の学生さんが映画を作ることをテーマに、そのためのブースが設けられていた。牧原さんの映画を見て、音の見える映像だと感じるという感想を持った方がいた。それに対し、牧原さんは「耳の聞こえない人にはもともと音の概念はない。つまり音が見えるようにという気持ちもない。自分がいいと思う、心地の良い映像。それがそう感じさせたのかも知れない。」と語る。映像作家になるきっかけは、二〇一二年にたまたまイタリア旅行に行った際に、たまたまある映画祭に出席したことだそう。当時、自分の表現方法

COLUMN 子ども食堂 ~子ども達に笑顔と安心を~

TURN とは少し話題が逸れるが、『子ども食堂』を初めて開いた近藤さんに話を聞くことができたので紹介する。『子ども食堂』とは、事情があつてご飯を食べることが困難であったり、寂しさを抱えて過したりしている子ども達が無料や低価格で食事を提供する場所だ。その活動は今では日本中に広がっていて、その支援の内容も様々だ。メディアにも多く取り上げられ、全国の人々が知る活動の一つとなっている。そもそも活動のきっかけは、知り合いの小学校の校長先生に聞いたある子どもの話だった。母親が病気でさらに一人親であり、母親の体調が良くない時に、「ご飯を食べられない子どもがいた。物も食べ物も豊かなこの国でそのような境遇にある子どもがいることに驚き、そしてその後ろ姿を想像した時に、可哀想という感情ではなく、悲しくせつない気持ちになつたという。島根県出身の近藤さんは、幼い頃から困つたときにはお隣さんに助けられた。自身が体験した地域の助け合いの輪を、近藤さんは広げたいと思つたのだろう。『子ども食堂』の始動には一〇年という年月がかかり、実際に話を聞いた子どもの手助けをするにはできなかったが、地域の居酒屋さんからその活動は始まった。食べ物への力はすごいと、近藤さんは語る。みんなでご飯を食べると嬉しく楽しい気持ちになる。また、食べ物は場の空気を和ませてくれ、たとえ初対面の相手でも、食事をすれば気持ちと和らげることができる。その想いに賛同した人々の力もあり、助け合いの輪は日々広がっている。家庭環境や学校での環境のために、寂しい思いをする子ども達が少しでもいなくなっていくほしいと思う。

を模索していた牧原さんは、これこそ自分の求めている表現方法だと思つたのだという。自ら映画を制作していく中で、この楽しさを子ども達にもと、同ワークショップは開かれた。子ども達の発想は予想外で素晴らしいと、今回改めて感じているそう。現在多くの映像は音メインの映像である、自身の作る映像と比較する。映像だけでなく、音声言語がメインの世界だが、もつと以前は視覚言語も使われていたろうと語る。耳の聞こえない人のための手話、目の見えない人のための点字など、音声言語ではなくとも、触る・見るなど五感をフル活用することで感じることのできるものは案外多い。

てなかつたなあと思ひ、ご飯を食べると回復した」という話だ。作者自身は現在、ラジオに常に盗聴されている。という妄想を抱えて生活している。最近では逆の発想の転換で、静岡を都に、をスローガンにむしろそのラジオの盗聴を利用して、自ら発信するというように、日々忙しく過しているそう。私たちは精神障害を持っている方達が苦しみを抱えているのは知っているかもしれないが、具体的な苦しんでいる内容は知らないことが多い。また、無理に妄想の症状そのものをなくそうとするのではなく、その妄想を逆に利用してしまうという発想の転換は思いもよらず、新鮮なものだった。『幻聴妄想かるた』という新たなツールがより社会に浸透し、精神障害を持つている方もそうでない方も、快適に過ごせる社会になればと思う。